



電車が来ました

---

電車開業式  
第三話

---

oerxx

---

## 電車が来ましたー

---

工事は、順調に、行われていました。

次に、必要なのは、主役の電車でした。

資本金の都合で、最初から、新車はあきらめていました。

どこかの、会社で、使っているが、それを、手放してもよいと、いうのを探しました。

その、話が、耳に入ると、見に行きましたが、やはり、手放すだけの、理由がある、電車でした。

これには、電灯会社の社長も、困ってしまいました。

工事は、そんなことに、関係なく、どんどん進んでいるのでした。

旅館組合でも、電車のいい出物がなくて、電灯会社が困っているという噂が入ってきました。

その電灯会社で、ある日外から、帰って来た専務山野が、社長室に飛び込んで来ました。そこにいた、社長花田に向かって、

「社長、電車がありました。」といいました。花田は、出物もないと、半分あきらめていました。

「新品は、駄目だぞ。高くて買えやしないから。」

「それが、新品なんですよ。」

「新品は、駄目だといってるじゃないか、俺の言っていることが、解らないのか。」

「まあ、社長黙って聞いて下さいよ。東京の車両会社に、注文流れの、電車がそれも、二台あるそうですよ。」

なんでも、その電車を注文した、会社が、手付けだけ払ったあと、資金が集まらず、会社を閉めてしまった、そうです。

車両会社では、次の買い手を捜しているそうですよ。代金も、閉鎖した会社が払った後の、残額だけでいいそうですよ。」

「そんないい話、どこから聞いて来たんだい。明日にでも、お前と二人で、その電車を、見に行こうや。よく見て、これでいいとなったら、旅館組会を呼んで、見せてやろいじゃないか。電車は、こっちで段取りを、つけることになっていたから、これで、旅館組合に、面目がたつというものだ。」

その翌日、電灯会社の社長と専務は、汽車に乗って東京に、向かいました。

旅館組合には、電車を見て使えるものだったら、すぐに連絡するから、そうしたら見にくるように、伝言を残して、出掛けました。

その日夕方、組合長西村のところに、電灯会社の社長から、電話が入りました。

「新しいし、すぐ使えるから、見にきるように」と、言ってきました。

その次の日、西村は、準備委員の前村と、田村の二人を連れて、東京へ向かいその足で、電灯会社の社長達と一緒に、車両会社へ向かいました。

一行を、出迎えた、車両会社社長大川は、みんなに向かって、

「私達が、一生懸命造った電車の、働く場所が出来て、私共は喜んでおります。電車は既に完成していますので、いつでも、貨車に乗せて、お送りすることができます。」と、いうと。電灯会社の社長花田が、

「待ってくれよ。まだ、線路が出来あがっていないんだよ。」

「冗談ですよ。まあ、ユックリ電車を見て下さい。後で線路が出来あがるのが、いつになるか、教えて下さい。

そして、貨車から降りしたらすぐ、線路の上に載せられるように、仮の線路をできるだけ、傍まで敷いて下さい。」とって、

「みなさん、こちらへどうぞ。」とって、工場の裏の空き地に、案内しました。

そこに、二台の電車が、置いてありました。注文した会社が、違うというので、顔付きも、横の姿も少し違っていました。

全体が、栗色に塗られていて、日光が当たってキラキラ、輝いていました。

その電車を見て、みんなはしばらく黙っていました。多分いま敷いている線路の上を、この電車が走る姿を、想像していたのかも、しれません。電車の周りを、廻ったり、下を覗き込んだり、していました。

電車を、見るのが初めての人達ばかりですから、そして、手でさわること出来るのですから、

しばらくすると、大川が、

「それでは、みなさん、電車の中を御案内します。」とって、電車の端にある電車の運転台のステップの上に乗って、みんなを呼びました。

運転台の後ろは、真ん中が引き戸になっていて、それを開けて入ると、そこは客室です。床は油が塗ってあって、光っていました。泥が付いた履物では、歩くのが悪いような、気がしました

。

その、客室は、両側には窓を背中して、端から端まで長椅子になっていました。

椅子に座ると背中が当るその上は、ガラス窓になっていました。その窓のすぐ上には、棚が、端から端まで付いていました。その手前には横に、丸い棒が渡してあり、そこから吊り輪が、十本ばかり下がっていました。

大川、車内にいる人達に向かって、

「この電車で、両側に、八人ずつ座れますから、合計で十六人座れます。立ってこの吊革に、つかまっていたくお客さんが、やはり両側で、合計十六人 その隙間に八人ということで、四十人の、お客さんを、乗せられますかな。」

これを聞いて、また皆は、ビックリしました。湯ノ津温泉人力車商会には、人力車が二十台しかないんですから。

湯ノ津から来た人達は、電車が一度に四十人も、乗せられることに驚いていました。そんなことは解らない車両会社の、社長大川は、電車を見ている人達の声をかけました。

「みなさんは、今日朝早く、湯ノ津を、御出発なさったので、お疲れのようですから、こちらでお茶でも、飲んで下さい。」と、いって事務所に、案内しました。

みんなが、事務所に入り、席に着くのを待って、

「御覧戴きましたように電車は完成しております。いつでもお届けできます。それにつきまして、お願いがございます。電車は、貨車に乗せて運びます。本体とは別に、車や、床の下に取り付ける部品は、外して木枠で梱包して、一緒に貨車にのせます。なんといっても、客室本体が、一番重く大きいのです。それに全部くっつけてしまうと、貨車に乗せるときも、降ろす時も、大変だからです。

それで、電車を降ろすときから、取付けないで運んだ部品の取付けて、実際に動くようになるまでの作業をするために、当社から職員を二名派遣いたします。そして、そちらでお望みなら、彼等は、この電車を毎日動かす運転士さん、この電車を保守なさる工員さんの、指導もいたしますが、いかがでしょうか？

その期間は一ヶ月としましょう、電車がそちらへ到着してから、二週間は電車の整備と、運転士の訓練、そして営業開始して、あとの二週間は、電車の様子を見ると、いうことにしたいのですが、

うちから派遣する、職員は、うちの社員ですから、給料は当社で払いますから、御心配なく、ただそちらが、お宿が本業でいらっしゃいますかれ、お宿だけは、お願いしたいのですが。」と、いって座りました。

それを、聞いた電灯会社の社長花田と、旅館組合の組合長西村は、顔を見合わせ、頷きあった。そして、西村が立ち上がり、

「そこまで、御心配下さいまして有難うございました。電車を、送っていただく日は、工事の様子を考えた上で、後日、御連絡いたします。またそちらから、お出でいただく社員の方の、お宿は喜んで引き受けさせて、いただきます。食事も、お口に合うようなものは、さしあげられないかと、思いますますが、それも提供させて、いただきます。どうか体一つでいらして下さい。」と

、話しました。

工事が終わればいつでも、電車が来るといので、工事をしている人達は、言うに及ばず、町の人達も目が輝きだしました。

線路も、貨車から電車を降ろす省線の駅の、ホームの脇まで敷きました。この線路は、電車を運びこんだ後は、外して、車庫に使う予定の線路で、資材置場から、大八車に載せて運んで来たのでした。

電車が、明日、鉄道の駅に着くという前日、約束通り車両会社の職員が、二人石原と、小野が湯ノ津に来ました。

そして、鉄道の駅から、この温泉町の車庫まで、電車を運ぶことを、請け負った、鳶の親方権藤と、明日の仕事について、打ち合わせをし、その後、車庫にいき、部品を、置く位置を、コンクリートの床に、白墨で、梱包に書かれてある、番号を書き、そこに置くように頼みました。

次に、線路を、歩き始めました。遅れて来た、線路を敷いた土木会社の社長太田も、付いてきました。

石原は、その太田が来るのを、待っていたかのように、みんなに向かって、話し出しました。

「明日省線の駅に、電車が着くが、明日は貨車から二台の、電車を降ろすのに、夕方まで、かかると思います。

明後日、この線路の上を、みんなで押したり、引いたりしながら、電車を町の車庫まで運んで行くんですが、一番怖いのは、坂道なんです。

それも、町に向かって、下りになっている坂なんです。そこへきたら、一旦止まって、みんな気を引締めて、電車が、転がり出さないように、みんなで、電車に取付けた、ロープをシッカリ持たなきゃなりません。今日はこれから、下り坂の出発点に、この赤いきれを、線路に巻いて行きますから、その場所を、教えていただきやいのです。」

いつのまにか、車両会社の社員の周りには、旅館組合の組合長や、委員達、電灯会社の社長や、専務、社員達が、取り囲んでいました。

石原は続けて、太田に、

「こんなことで、明後日は、大勢が歩くから、折角きれいに積み上げた、砂利が崩れてしまうが、勘弁して下さい。

それと、こちらは、最近雨は、降らなかったですか？」と、聞かれ、太田は、  
「ハイ、仕事を始めた最初は、降りましたが、最近は全く降らないので、工事はどんどんはかどりましたが、」

「電車が、お客さんを、乗せて走り出す前に、一雨欲しいね。」

「そうなんですよ。降ってくれば、どこが雨に弱いのか、降った水はどのように、流れて行くか、それらの水に対して、線路をどう守ったらいいか、わかるんですから。」

「そうだね。」

「明後日、電車を、温泉町の車庫に、運び込んだら、内祝があるんだろ。あなた達も、呼ばれているんだろ。」

「ハイ。」

「あなた達はこの線路のことを、よく知っているのだから、電車が走り出してからもこの線路の面倒は、あなたがたが見ることが出来るように、いままで通り仕事を、させてやって欲しいと、明後日、私のほからも、話しておきますよ。

だがここの電車の、会社の社長は、まだ、決まっていないようですね、たぶん旅館組合か、電灯会社か、人力車商会か、三者のいずれかから、出るんでしょうから、あなた達はこの線路を、よく知っているんだから。」

「有難う、ございます。よろしく願います。」といって、土木会社の、社長太田は、頭を下げました。

今度は、鳶の、親方権藤に向かって、

「明日までに、一間位に長さで、先を平らに削った檜の棒を、五・六本用意してくれませんか。」といわれ、親方は、

「解りました。」と、返事をしました。

一方、もう一人の社員小野は、みんなに、教えられて、線路に、赤いきれを、巻いていました。

そして、省線の駅に着くと、貨物ホームの傍まで、伸びた線路を見て、一同は解散しました。

その翌朝、省線の駅に、みんな集まって来ました。貨物列車が駅に着いたばかりでした。

これから、電車の乗っている貨車を、貨物列車から切放して、貨物のホームに移動させる、作業を始める、ところでした。

車両会社の、社員石原は、駅に入って行って、何か頼んでいるようでしたが、やがて出てくると、みんなに向かって、

「いま駅に電車の乗った貨車を、ホームに着ける前に、側板を、下に下げてから、ホームに着けるように、頼んで来ました。砂利などを積んだときに、こぼれないようにある、脇の板ですが、電車を、降ろすのには、邪魔になりますから、また、ホームへ着いてから、開くと、電車はその上を、通さなければ、なりません、これは危なくて、出来ませんので。」といいました。それを聞いて、みんなは、さすがに、プロは考えることが違うなど、感心していました。

貨車の入れ換えをやっていた、機関車が、電車の載った貨車を押して来て ホームの脇で止め



ました。旗を振っていた、車掌が、連結器を外すと、旗をまた振りました。

機関車は、汽笛を鳴らし、貨車から離れて行きました。

それまで、機関車の動きに見取れていた、温泉町の一同は機関車の汽笛を聞いて、われに帰りました。

ここからは、鳶の出番です。車両会社の、社員石原たちと話をしていた。親方は権藤は連れて来た数人の配下に向かって、仕事の指図を始めました。

「まず、車とその周りになある箱を降ろそうや。そうすれば、電車の周りが広がって、電車を降ろすのに楽だから。

箱は、邪魔にならなように、その辺に重ねて置いとくように、車は鉄だから、六人で担いだほうがいいな。」と、言って、

「車の一組は、線路に載せてしまつて、もう一組は、線路の端の線路のないところに 置いとくように、」と、いいました。

車は、バーベルのように、車軸の両端に車輪が、付いていました。

この車軸に、帯を廻して、その帯を輪にして、そこに棒を通して、担ごうというのです。

車軸は、鉄でできていて、ピカピカ光っています。じかに帯を廻すと、滑るので、蓆を切って、車軸に巻きつけてから、帯を回しました。

帯は、柔道着に使うような、分厚いもので、それよりも、幅の広いものでした。

その帯を車軸に巻き付け、担ぐ人達の肩の高さに合わせた、大きな輪を作り横に それに棒を通して、この棒を担いで、車輪を運び出すことにしました。

車輪の、すぐ内側は、担いでいる人の、足に車輪が当たらないように、長い棒で、真ん中は、担いでいる人同士の、足が、あたらないように、短い棒を、車軸を巻いた帯に差しました。

車輪を、運ぶ人達は、自分の体の合わせて、帯を、調節していました。それを、見て居いた親方は、

「どうだい、決まったかい。」という。車輪を、運ぶ人達は、一斉にうなずきました。それを見た親方は、

「ヨシ、いこうや。」といい、続いて、大きな声で、

「セイノー。」いうと、他の人達も、声を合わせて、

「セイノー。」大きな声を出して、かがめていた腰を、伸ばして、棒を担ぎ上げました。車輪は、少し浮き上がりました。

すぐに親方は、前を出て、両手を、大きく拡げ、大きな声で、

「そのまま、待て。」と言って、担いだままの状態にしておいて、一周りしてその様子を見ました。車輪が、水平になっているか、荷の重さが、担いでいる人達に、同じように、負担されているかどうかを、見たのです。そして、親方が、

「ヨシ。降ろせ。」というのと、車輪は、貨車の床に、また、載りました。担ぐ人も、各自の、負担分が、これで解ったのでした。すぐに、親方は、

「ヨシ、本番だ。線路の端まで、持ってってくれ、もし途中で駄目だったら、大きな声を出せ、それから、腰を落とせ。

「サア、行くぞ。セイノー。」、担ぐ人達はもちろん、見ている人達も、一斉に、

「セイノー、エッサ、エッサ。」とあって、担いでいる人達と唱和しながら、集まって来ました

。

線路の端に、先周りした、鳶の親方権藤は、地面に棒で印を付けて、車輪を、担いで来る人達に向かって、

「オーイ、ここだぞ。」と、仕事の終点を、教えました。車輪がそこまで来ると、線路の先端に、車輪が合うようにしてから、降ろさせました。線路の周りは、線路の高さまで、砂利が盛ってありました。

「棒や、帯はそのままにしとけ、これれはまた、線路に載せるときに、使うから、まず、一服だ。」と、権藤に言われ、担いで来た人たちは、肩から棒を外すと、大きな息をして、座りこんだり、仰向けに寝て、空を眺めたりしました。

みんなの息が、静かになると、親方は、みんなに向かって、

「もう、わかったろ。」と、いうと、まだ、声が出せないの、みんなは、黙って頷きました。いま、している仕事を、それぞれの体が覚えて、それに対応することが、できるようになったか、尋ねたのでした。

また、権藤は、棒を拾うと、今日する仕事で使うであろう場所の外側に、その棒で大きな円を描いて、見物している人達に向かって、

「みなさん、見ていて下さっても、結構ですが。この線から、中には入らないで下さい。もし、私達がやりそこなったとき、近くに、いらっしゃると、巻き添えを食って、怪我をされると、いけませんから。」と言った。そして、連れて来た中から、二人の若い人を呼んで、

「お前たち二人は、こっちと向こうにいて、この線の中に、入ってこないように、座って見張っている。大人は大丈夫だろうが、男の子は、入って来るかも知れないから、そのときは、注意して、それでも、いうことを聞かなかつたら、けつの一つも、叩いてもいいから。」と、二人に、見張りをさせました。

来ていた旅館組合の組合長西村と、目が合うと、権藤は、

「組合長さん。ずいぶん大勢、見に来ているけれど、この近辺にこんなに、大勢住んでいたのかね？」西村は、それを受けて、

「俺も、ビックリしているんだよ。キット温泉町には、女と婆さんしか、残っていないんじゃないかな。」

「男共が、温泉町の住人なら、明日また来るだろうから、帰りは電車を、押していってもらい、

上り坂は大勢で、引張ってもらわないと、無理だから。」

「マア、それもいいな。」と、いって権藤は仕事に戻りました。

権藤は、置いてある車輪の前に来ると、休んでいるみんなに向かって、

「サア、始めよう、一回でいいかな。」と、いわれ、みんなは、頷いて立ち上がりそれぞれの、位置に付いて、帯が緩んでいないか、調べて棒を帯に差し、棒の下に肩を入れて、担ぎ上げる準備が出来上がりました。

それを見ていた、権藤は、

「線路の一番端に載せるから、そこへ来たら止まってくれ。俺が合図をするから、そして、降ろせというから、ユックリ降ろしてくれ。じゃー、いいかな、行くぞ。」と、いって、大きな声で、

「セイノー」と、いうと、車輪は持ち上がり、前に進み始めました。車輪が線路の上まで来ると、親方は、大きな声で、

「止まれ。」というと、車輪は止まりました。二つの車輪が、線路の真上にあることを、確認した親方は、

「降ろすぞ、ユックリ降ろすぞ、さあー、始め、ユックリだぞ、ユックリだぞ。」担いでいる職人たちは、ユックリ腰を、落していきます。担いでいる六人全員が、同じように落して行かないと、危険な仕事です。

すぐに、肩が軽くなったのです。車輪が、線路の上に乗ったのです。

見物人から、歓声が上りました。権藤はすぐに車輪が、転がらなうように、車輪と線路の間に、石を挟みました。

もう一組の車輪は、線路からやや離れたところに置きました。

次は、電車の本体、車体です。権藤は、二台あるうちの、片方をの車体を叩きました。この車体から、始めようという合図です。

電車は、貨車の床にじかに置かれてなく、貨車の床との間に、角材が敷かれ、その上に載せられていました。

権藤はその隙間を覗いて、

「この 角は短いので、持ってきたやつの中からは、長いのを選んできて、この間に入れて、その下にコロを入れて、貨車から、外に出そうや。」と言って、持って来させた、角材を入れ、その下にコロを入れさせました。

そして、いままで、電車の下にあった、角材を外すと、車体は、新しく入れた角材の上に載り、それを押すと、コロが転がって、動き始めました。

二本の線路の中央には、線路の端から、厚い板が置いてあり、その上部は、線路の端へ向かって、坂になっていて、その先端は、地面に埋まっていた。

これは、半月ほど前に、車両会社の社員石原が、下見に来た時、土木会社の社長太田に作って、電車が来る日までに、取り付けて、くれるように頼んであったものでした。

車体が線路の端まで来る間に、石原は、車体の真ん中と、線路の真ん中が、同じになるように、権藤方に頼みました。権藤は、車体を押すてこを持っている職人に向かって、「右だ。左だ。」と言って、てこで、コロをこじらせて、中心を合わせて行きました。

線路の端まで来ると、鳶の親方権藤は、見物客に向かって、

「みなさん、見ているだけではつまらないだろうから、これから、手伝ってもらえないでしょうか？」

この電車が、この坂を上るので、前で引張って、もらえないでしょうか。」と、さっき車体を、縛っていた、太い縄を、車体の前に結びつけました。

見物客の中から、何人かの男が、その縄の傍にやって来ました。親方はさらに、

「駄目だよ。見ているバツカリじゃ。こういう仕事は、大勢のほうが、楽なんだから。いま、手伝え、あとでいいことがあるよ。」と、いうと、また何人かの、男が出て来ました。

親方は、その人達に向かって、

「車体が、坂を上がるまで、お願いします。途中休みなく、いっきに行きますから、合図するまで、ドンドン引張って下さい。」と、今度は、後ろ見て、

「お前達は、いいかい。」と言われ、斜体の後ろにいた、職人達は、みんな頷きました。

親方は、

「ヨーシ、行くぞ。」といい、大きな声で、

「ヨーイ、ドーン。」という、車体は、線路の間にある、幅が広くて厚い材で作った坂を、上り始めました。

「ヨイシヨ、ヨイシヨ。」と、引張るほうも、押すほうも、一生懸命です。車体は少しずつ、坂を上り始めました。

車体が、坂を上りきって、平らな所に着くと、親方は、大きな声で、

「ヤメー。」という、車体は坂の上で止まり、親方は、コロと角材の間に、車体が滑り落ちないように、小さな石を、挟みました。みんな、手拭を出して、汗を拭き始めました。親方は、手伝ってくれた、見物客に向かって、

「有難うございました。明日、温泉町の入口に出来た、この電車の車庫の上から、餅を蒔きます

から、ぜひ来て下さい。」と、いい、いま車体が上って来た坂を、外しました。そして、見物人を見張っていた、若い二人を呼んで、まだ線路に載っていない、車輪を、先の平ら棒で、線路の近くまで、移動させました。

坂を、上り終えた車体は、みんなで押しながら、ユックリと、前に動かして、線路の間に敷いてある、材がなくなったところまで来ると、そこに止めました。

今度は、車両会社の、社員石原が、前の車輪が置いてあるところから、後ろの車輪が、来ると思われるあたりまで、二本の線路の真ん中になるところの、枕木の上に赤い糸を張りました。また、車体の真ん中にも、窓から下に赤い糸を下げました。そしてこれから、車体を、少しずつ動かしながら、この二本の糸が会うように、動かして行ってほしいと、親方に頼みました。

それを、聞いて親方は、  
「解りました。ユックリ動かして、あわせますから。」といい、みんなに、  
「コ口を、こじって、合わせるようにするから、両側に一人ずつ、長い棒を持って、俺がいったら、コ口をこじってくれ。」と行って、前に立ち、  
「サアー、来いと。」と行ってすぐに、  
「右だ、左だ。」と、指図しながら、車体を、前に誘導し始めました。

車体を載せた角材が、線路の間に置いてある、材の端まで来ると、親方は車体を止めさせて、その材とコ口の間、小石を挟んで、車体が、動かないようにしました。

次は、車輪を取り付けるのですが、親方は、  
「オーイ。昼だ。飯にしようや。」と、行って仕事を、止めさせ、若い二人を連れて、脇に止まっていた、荷馬車の傍へ連れてて行くと、  
「ここに、積んである弁当を、みんなに配ってくれ、そして馬車が、空になったら、あそこに積んである、木箱を載せてくれ。」と行って、御者に、  
「うちの、若いもんが、積んだ木箱は、車庫まで持っててくれ、車庫に入ると、床に番号が書い

であるから、木箱の番号を見て、そこへ降ろしておいてくれ。」と頼みました。

そして、戻って来ると、見物客に、

「これから、昼休みに、しますから、どうぞお家に帰って、昼飯を食べてきて下さい。」といいました。

すると、あちらこちらで、その辺に腰を降ろして、腰に巻いてあった、風呂敷包を、腰から外して、弁当を拵げ始めました。

殆どの人達が、弁当持ちで、来ていたのです。親方は、また、車体の周りに広く、地面に棒で円を、描いて

「ここから、中に入らないで下さい。車両会社の方が、仕事をなさるなされるので。」と、いって、見物客を見渡しました。

そのうちに、子供達が、親方の目を、盗んで車体の周りに、やってきて、跳び上がって、中の様子見ようとしていました。なかには、何度も何度も、跳び上がっていたのですが、背が足りないで、中が見えず、疲れて諦めて、引返していってしまう、子もいました。



それに、気付いた親方は、若い二人を呼んで、  
「飯は、食ってしまったか。」と、尋ねると、二人は、口を揃えて、  
「ハイ。」といました。すると、親方は、  
「二人で、電車の傍で、チビどもを、抱き上げて、電車の中を見せてやって、くれないか。」と  
いうと、二人は、

「ハイ、解りました。」と、いって、電車の傍へ行き、子供達を、手招きしました。子供達は、

「ワー。」とあって、走って来た子供達は、二人を取り囲んだので、親方は、片手を上げて、  
「一列に、並べ。順番に見せてやるから。」という、子供達は、その通りに並び、おとなしく抱き  
上げてもらう順番を、待っていました。

午後になると、親方は、配下の職人達に向かって、

「昼前、降ろした電車は、車両会社の人と、俺と若いもんで、やるから、お前たちは、もう一  
台の、電車を貨車から、降ろしてくれ。

昼前やったように、二つの車輪を、まず降ろして、一つは、いまの後ろに置く。もう一つは、  
さっきと同じように、離して置く。そのうちに、いま車体の下にある、角とコ口はいらなくなる  
から、本体を貨車から降ろして、貨車を空にしたら、今日は、お終いにするから。

午後は、こっちのほうは、俺は面倒をみられないから、お前たちだけで、気を付けてやって  
くれ。危ないと思ったら、止めること、逃げ出すことだ。それじゃ、頼むぞ。」とあって、その場  
を離れました。

親方は、子供達を抱き上げて電車の中を見せていた。二人を呼んで、いま線路の間に敷いて  
あり、電車を載せたコ口を、転がして来た厚い板を指して、もういらなくなったので、

「これを、線路の外へ出して、あそこにある車を、電車の傍まで持って来い。」とあって、二人  
を指図して、車輪を線路の上に載せ、車体の近くまで、転がして来て、車輪と線路の間に、小石  
を挟みました。

次に、二人に指図して、さっき車体の先のほうの線路に、載っている車輪も、戻して来て、車  
体の近くに置き同じように、小石を挟みました。車両会社の社員石原は、さっき、線路の真ん中

に張った糸と、車体の正面に下げた糸を、見比べていましたが、親方に向かって、

「横の、狂いはありませんね。上手に、載せたもんですね。」と、うれしそうな顔をしました。

車体から下げた糸が、線路に張った糸に、触れているのです。親方も、仕事がうまくいったので、うれしそうにしながら、

「高さはどうですか?」と、いいました。

「それでは、それを調べてみましょう。まず前のほうから、調べてみましょう。」

そのとき、親方は、車両会社の、二人の社員に、傍にいた配下の、二人の若い職人を紹介して、

「この二人が、手伝いますから、何なりと言いつけて下さい。二人とも力だけは、ありますから。」と、二人に向かって

「おしゃる通りに、お手伝いしろ、こんな仕事は、めったにないから、お前たちにとっては、いい経験になるから。」と、いいました。早速、車両会社の社員石原は、若い二人の鳶に向かって、  
「まず、前の車輪を、車体の下まで、転がして来て下さい。」といい、二人は、先が平らに削ってある棒で、言われたように、車体の下まで、転がして来て、小石を挟みました。

石原は、車体の下に車体と、車輪をつなぐ軸受けを、鳶の二人に手伝わせ仮付けして、横からその両方を、見比べていました。やがて親方に向かって、

「車体のほうが、少し低いようですね。車体を、少し上げましょう。」といいました。そしてさらに、

「後ろの、様子もみたいですから。後ろの車輪も持ってきて、くれませんか。」という、親方は二人に、

「後ろの車も、持ってこい、さっきと同じように、車体の下までだぞ。」といいました。

二軸の車輪をが、車体の下に入ると、石原は、車体の周りを、グルッと廻って、見比べていましたが、

「全部車体のほうが、低いですね。一ヶ所ずつ上げて行きましょう。」といい、  
「まず、前の両側から、始めましょう。」という。親方は、  
「わかりました。あとどのくらい、持ち上げたらいいか、教えてやって下さい」といって、配下の二人に向かって、

「どのくらい、持ち上げたらいいか、教えてもらって、車体を持ち上げると、コ口は効かなくなるから、その分を足した高さの角で、長さは、いま車体の下にある角の幅より、長ければいいから、コ口と取替えるのだから、そんなのを、四五本作って来い。」といいました。

一本出来あがったの見た、親方は、  
「これじゃ無理だ。一度にこんなに、持ち上げるのは無理だから、コ口の高さと、この高さ半分の高さの、ものも作ってくれ。」と出来あがって来るのを、待ちました。  
車両会社の、社員石原と、小野は、残った三ヶ所にも、軸受けを取付けました。

親方が、頼んだ角材が出来あがって来ると、親方は、若い鳶の二人に向かって、  
「一人は、俺と一緒に棒で車体の下の角を、こじ上げるから、もう一人は、コ口の代わりに、切ってきた、背に低い角を、前の車の近くに、入れて、浮いたコ口を、外してくれ。俺が、いいと言ったら、始めてくれ。」と、棒を角材の下に入れました。

鳶の親方権藤は、若い職人のうちの一人と、声を合わせて、

「一、二、三。」といって、角材を、こじ上げて、もう一人にいま作ってきた角材とを入れさせ、コロを外させました。

「終わったら、いえよ、いつまでも、持ってられないから。」

「ハイ、解りました。」といって、若い職人はしばらく、車体の下で、ゴソゴソ、やっていましたが、

「終わりました。」といって、出て来て、その手に外したコロを、持っていました。親方は、

「サアー。降ろすぞ、ユックリ降ろせ。」といって、持ってる棒を下げました。

今度は、反対側、後ろです。親方は、二人を連れて後ろに来て、

「サアー。今度はこっちだ。さっきと同じだから、やりかたは、解っているだろうから。」といって、長い棒を持って、後ろに廻り、二人に、

「準備は出来たな。それじゃ、始めるぞ。一。二。三。ソレー。」というと、車体の下で、身構えていた、一人が、コロを外して、角材と入替えました。これで車体は、少し上がりました。それを見ながら、親方は、

「もう一度、上げるぞ。角の入替えだ。」といって、二人に向かって、

「交代するか。」といって、二人の仕事を、交代させました。

そのとき、親方が周りをみると、車輪を担ぎ出している、職人たちがいました。不審に思った親方は、すぐに解って、

「あそうか、この車体の下にある、長いのが欲しんだな。すぐに空くから、それまで、あそこで旅館の番頭さん達が、お茶を入れてくれているので、飲んで待ってくれ。」といい、何を思ったのか、親方はすぐに、

「アツツ、そうだ、誰か俺と変わってくれないか。」といって、親方は、お茶を飲んでる中の一人と、交代しました。

そして、後ろの車体の下にあった、コロから変わった、背の低い角材も、高い角材に代わり、車体は平らになりました。

こうして、ここまで車体を運んできた、コロとその上で車体を載せていた、長い角材はいらな

くなり、線路から外に出されました。

親方は、車両会社の社員石原に、  
「高さのほうは、どうですか。」と尋ねると、

石原は、車体に仮付けした軸受けと車軸の高さを、見比べ、その違いを測っていましたが。親方のほうを向いて、

「もう少し、車体を上げて欲しいのですが。ほんの少しなんですがね。これくらいですかね。」  
といて、

右手の、親指と、人差し指を、重ねて、親方に見せました。親方は、

「解りました。横で見えて下さい。車体を少しづつ上げて、いきますから、よかったら、教えて下さい。軸受けと車輪が、完全に車体に取付けが終わるまでは、車体を降ろさないように、しますから」といって、お茶を飲んでいる、職人達も、呼び寄せて、

「もう車体を少し上げるから、手伝ってくれ。後ろから始めるから、車体と、その下の角との間に、厚い板を詰めよう。」といて、30cm四方位の、板を切って来させました。

「後ろからやるから。角と車体との間に隙間が出来たら、この板をどんどん挟込んでくれ。」と、職人達に言いつけて、  
今度は、石原に向かって、

「それじゃ、持上げますから、見ていて下さい。そしてよろしかったら、合図をして下さい。」といて、職人達に、

「セイ。ノー。」と、掛声を掛けました。

運転台の先端から、線路に平行に差込まれた長い二本の棒を、二人ずつで持上げると、車体は、ジワジワ持ち上がっていきました。

車体が上がりはじめると、石原は、軸受けと車軸を見比べながら、右手を横に出し、手の平を上に向け指先を伸ばして、その指を下から上に上げたり、下げたりしていました。まだ上げて欲しいという、合図です。

それを、見ていた権藤は、  
「まだ、まだ、」といい、板を持って待機していた職人に向かって、  
「板が入るだけ上がったら、板を挟め、」といいました。

これを見ていた石原は、やがて、手の平を返して、上から下へ下げ横で止めました。望んでいた高さまで、車体が上がったので、車体を持上げる作業は、止めてもよいという、合図でした。権藤はすかさず、大きな声で、

「ヤメー。」といって、棒を持って車輪をこじ上げている、職人には、  
「このままで、こらえている。いま板を挟んで、棒が抜けるようにするから。」といい、他の職人には、

「板を、差込んで、棒が抜けるようにしろ。」と急がせました。

車体の下に差込んであった、二本の長い棒が抜けると、権藤は、  
「今度は前だ。同じようにやればいいんだから、」といって、職人達を反対側に連れていきました。

そして、二本の長い棒が差し込まれると、大きな声で、  
「セイ。ノー。」と掛け声を掛けました。車体はジワジワ上がって行きました。  
一緒に付いて来た、石原の手の合図で、車体の高さが決まると、長い棒は二本とも、車体の下から、抜かれました。

権藤は、若い二人に向かって、

「お手伝いしろ。」といって、車両会社の社員が車体に仮付けしてある、軸受けに、車輪を取付ける、手伝いをさせました。

車輪の車軸が、軸受けに取付けられると、電車はいまにでも、走り出しそうに、見えました。

残っていたもう一台の電車の車輪はもちろん、車体も、コロと長い角材が使えるように、なったので、貨車から、降ろされました。

それを見ると石原は、駅に貨車から、電車全てを降ろし終わったことを、報告に行きました。戻って来た石原に権藤は言いまし。

「きょうは、これで終わりにしますから、宿に帰って、お休みになって下さい。」という、見物客の中から、出て来た湯ノ津温泉組合の組合長西村も、

「この、電車は、今夜ここへ置いておきますが、私達で、今夜は私共で見張っていますので、安心して休んで下さい。

宿まで、お送りする人力車も来たので、どうぞお帰りになって下さい。」という。

「それでは、お願いします。」といって、石原達二人は宿へ戻りました。

権藤は、配下の職人達に、

「きょうは、これで終わりにするから、道具や資材はまとめて、掃除をして、お終いにしよう。」といい、若い二人には、

「お前達二人は、貨車の中の掃除をしろ、人様のものだから、きれいにして、お返しするんだ。間違っても、線路の上に掃き落とすな。」

貨車がいなくなれば、すぐにバレることだから、そんなことをすると、駅長さんは、今後お前達を汽車に乗せてくれなかも、しれないからな。」と、片付けの仲間に入りました。

掃除、片づけが終わると、権藤の配下の職人達は、権藤に挨拶して、帰って行きました。周りを見ると、大勢いた見物人も、いつのまにか、いなくなっていまい、あたりは静かになってしまいました。

権藤は一人になってしまい、しゃがんで沈んで行く夕日を、眺めていました。そこへ、どこにいたのか、湯ノ津温泉組合の組合長中西がやって来て、

「親方、御苦労さんでしたね。」すると、権藤は声のした方に、顔を向けて、  
「組合長、今日は終わったが、まだ、明日があるから、明日この二台の電車を湯ノ津の、車庫に入れてしまうまでは、終わったとは言えませんが。」

「そりゃそうかもしれないが、今日の仕事は、終わったんだよ。明日は明日さ。」

「組合長、俺はこんなにうまくいくとは、思わなかった。半月ほど前、車両会社の石原さんが来て、いろいろ教えてくれたが、電車を見たことがないから、いくら考えてとも、よく解らないうちに、本番になってしまったんだ。」

「だから、今日仕事をしていても、何か忘れてるんじゃないかと、ズウット思っていたんだ。」さらに、続きます。

「いまはうまくいっても、次は失敗するんじゃないだろうか、それがなんとか、うまく行くと、この次こそ駄目んじゃないかと、ズウット思っているうちにここまで、来てしまったんだよ。」い言いました。聞いていた西村は、

「親方がそれだけ、心配したから、うまくいったんだよ。これからは、明日うまくいくように、心配してくれ。」といわれ、権藤は、

「そうですね。今日は終わったんだ。明日のことを考えようや。」

「親方、そうだよ。ところで、親方、今夜どうするんだい。人力車で俺の宿まで行って、温泉に入って、今日の疲れをとらないかい。飯もいつも同じでうまくはないけど、酒でも飲んで、疲れをとらないかい。奥さんのところには、親方が今夜、うちに泊まるから、心配いないように、



言ってあげるから。」

「そうですか、それは、有難いたいな、それでは今夜お世話になるとするか、だが電車はどうするんだい。」

「組合から、今夜は、交代で何人かで、見張ることにしているのだが、そろそろ誰か来るんじゃないだろうかな、来るまで、少し待ちますか。」

夕日が沈んでしまい、あたりが暗くなるころ、西村のところの、二番番頭が小僧を連れてやって来ました。西村は、

「御苦労さん、 何もないと思うけれど、よろしく頼む。お前さんたちが、この電車の最初のお客さんだ。それを記念として、只にしておくから、寒くなったら、電車の中で寝て居てもいいから。夜中に誰か交代がくるんだろ。それまで頼むよ。」というと、二番番頭が、

「ハイ、隣りから、夜中に来てくれる、ことになりました。」

「そうかい、それならよろしく頼むよ。」といって、二人は人力車を呼んで、帰って行きました。

翌日は、曇天でしたが、雨の心配はありませんでした。

省線の駅前には、鳶の親方権藤を、始めとして、配下の職人達、車両会社の社員、石原、小野、温泉旅館組合の組合長西村など、昨夜置いて来た電車の、関係者ばかりでなく、大勢の見物人も、また集まって来ました。

鳶の親方権藤は、配下の職人達に向かって、

「昨日の続きだ。やることは解っているんだから、おわてずに、ユックリやってくれ。ただ、その前に、昨日降ろした電車が、邪魔だから、少し動かそうや。」とって、石原に、

「昨日、先に、降ろした電車は、次の電車の邪魔になるから、少し動かしませんか。」という、石原は、

「そうですね。そうしましょう。」と同意しました。

親方は、先の平たい長い棒を、持って来させて、平たい方を、車輪と線路の間に入れさせ、右側と、左側の職人に、一緒に、こじるようにいいました。

残った、職人達は、全部後ろに集めて、車体を、押すようにいいました。

「サア、行くぞ。一。二。三。」と、親方が言うと、電車は、最初はビクともしませんでした。が、ゆすっているうちに、ユックリ動き始めました。

石原のほうを、見ていた親方は、石原が頷くと、大きな声で、

「ヤメー。」と言って、電車を止めさせ、全部の車輪と、線路の間に、石を挟みました。

親方は、職人達に、向かって、

「あとは、昨日と同じだ。まず前の車を、線路に載せて、前の方まで持って行く。次に車体を持ってきて、線路の間に置く、そして、後ろの車を、車体のそばまで、線路の上を、転がして来る。それを、昼までに、やってしまおう。時間はタップリあるから、あわてないで、ユックリやってくれ。

今日、俺は、手はもちろん、口も出さないから、まかせたよ。」という、配下の職人達は頷きました。

親方が、予定していた、仕事が終わりました。親方は、

「少し早い、昼飯にしようよ。午後も早く始めて、電車を、早く、温泉町の車庫まで、持っ

ていこうや。」といい、若い二人に、温泉町から、荷馬車に積んで来た、弁当を、配らせました。

車体に取り付けられた、軸受けに車軸が通されて、ここでの組立ては、終わりました。親方はまず、若い二人を呼んで、

「これで、ここでの仕事は、終わってから、全部片付けて、掃除をして、馬車に積んでくれ。」と、片付け始めました。終わると、また二人を呼んで、

「これから、みんなでこの電車を、温泉町まで線路の上を、みんなで押して行くんだが、お前達二人は、先頭を、歩いて行け、坂の手前には、赤い布が線路巻いてあるから、そこへ来たら、合図をしてしてくれ。そこで電車を押して行くのをやめるから。」と、電車の行列の先頭に、立たせました。

次に、貨車から下ろした太い綱を、二台の電車の、それぞれの前の運転台に縛り付け、余った綱は運転台に載せました。

他の職人達のなかの四人に、先の平たい長い棒を持たせて、車輪と線路の間に、先を入れて、こじるようにいいました。残った人達には、後ろから押すように、指示しました。

みんなが、いわれた位置に着くと、親方は、見物していた人達に向かって、

「みなさん、ここでの仕事はこれで、終わりです。手前共は、これから、この二台の電車を、湯ノ津の車庫まで、運んで行きます。みなさん御存知のように、途中には、上り坂があります。この坂を上るときには、一緒に引張ってもらえませんか。」という、何人が出て来ました。それを見て、親方は、

「ヨシ、出発するぞ。まず前の電車からだ、みなさん、一緒に押して下さい。ソレー。二。三。」

前の電車は、ユックリ、動き出しました。線路が平らなところは、力を入れなくても、動いていきます。押している人達は、拍子抜けしたようでした。電車が動き出したのを見ていた、親方は、後ろの電車の周りにはいる人達に向かって、

「ヨシ、こっちも行くぞ、いいかい。ソレ。一。二。三。」という、後ろの電車も、動き出しました。

残った、見物人は、その後ろから、ゾロゾロ、付いて来ます。電車は、お祭りの、山車のような感じです。

しばらくすると、前を歩いていた、二人から合図がありました。坂の下に来たのです。ここか

ら先は、上り坂です。親方は、電車の前に立って大きな声で、

「止まれ。」というと、みんなは、電車を、押すのを止め、電車は止まりました。

親方は、後ろの電車の傍に行くと、四つの車輪の両側の、線路との間に、木端を挟み、後ろの電車を押していた人達に向かって、

「これから、前の電車を、坂を上らせてますから、みなさんも、前の人達と一緒に、前の電車を引張って、下さいませんか。」といい、運転台に載せてあった、綱を引張り出して、前に伸ばしました。そして、

「みなさん、どこでもいいから、この綱を持って、合図があったら、引張って下さい。」という、後ろから呼ばれて来た人達は、思いも思いに綱を持ちました。その中には、組合長や、いつ来たのか電灯会社の社長の花田もいました。

親方が、前の電車を、押している人達を見ると、いつでも始めていいと、目で合図が帰って来ました。

鳶の親方権藤は、

「ヨシ。行くぞ。一。二。三。ヨイシヨ。ヨイシヨ。ヨイシヨ。」と掛け声を、かけました。引いている人達も、押している人達も、声を合わせて、

「ヨイシヨ。ヨイシヨ。ヨイシヨ。」と、引張り、押ししたりすると、電車はソロソロと、坂を上り始めました。

綱を引張っている人達の横で、親方は、

「もう少し。もう少し。」と、引張っている人達を、元気付けていました。

電車が、坂を上り終わると、引いている人達も、押している人達も、楽になりました。親方は、

「マダ、マダ、ソノママ、ソノママ。」と、先へ進ませました。

これは、後から坂を上って来る電車を、すぐに止めることが出来なかったら、衝突する恐れがあったので、なるべく離れたかったのです。それでも、ここなら大丈夫と思われる、ところからだいぶ離れたとき、やっと親方は、

「止まれ。」と、電車を止めました。すぐに車輪と、線路の間に、木端を挟みました。

そして、先頭にいた、若い二人に、

「綱を、巻いて電車の中に入れといてくれ。そして、今度は後ろの電車だ。」といい、

「みなさん、今度は後ろの電車を、お願いします。」と、いまきた、線路を戻りした。

そして、い後ろの電車も、同じようにして、上り坂になっている、線路を引張りあげました。

また、線路が平らになると、押すだけになり、力もそんなに、いりませんでした。

今度は、下り坂です。親方は、若い二人に、向かって、

「さっき使った綱を解いて、持ってきて、後ろの運転台に縛付けてくれ。」といい、二人がいわれた通りにして、綱を、後ろ伸ばしました。それを見て、親方は、

「みなさん、この綱をシッカリ持っていて下さい。そして、ユックリ緩めて下さい、アブナイと思ったら思いっきり、引張って下さい。それでは、私達が、電車を、少しずつ押しますから、少しずつ、緩めて下さい。」といい、

「それでは、一。二。三。ユックリ、ユックリ、緩めて下さい。緩めて下さい。」という、電車はジワ、ジワ、坂を下り始めました。

平らなところへ、電車が来ると、みんなが、綱を放して、そこに座り込んでしまいました。緊張が解けて、ホットしたのです。親方は、二人に、綱を片付けさせ、坂の上に止まっている、後ろの電車のところへ行き、綱を結び付ける準備をさせました。親方は、みんなの息が静かになる

のを待って、

「みなさん、もう一台お願いします。」といわれ、みんなは、坂の上へ上がって行きました。坂を、上ったり、下ったり何回か繰り返して、やっと、電車は湯ノ津の車庫に入りました。

そこへ、組合長の、西村が出て来て、

「みなさん、御苦労さんでした。仕度が出来ているから、一杯飲んでいって下さい。」といい、いままで電車の後ろから、ゾロゾロ付いて来た、女子供に、向かって、車庫の屋根を指差して、

「あそこの、上から餅や菓子を撒くから、拾っていってくれ。」といいました。それを聞いた、女や子供は教えられたほうに行きました。

しばらくすると、餅撒きが始まり、賑やかになりました。

餅撒きも終わって、あたりが静かになると、姿を消していた親方と、西村が現われました。そして親方は、職人達に、

「さー、行くぞ。」という、職人達は顔を見合わせ、その中の一人が、

「エー、どこへ行くんですか。まだ仕事なんですか。」

「いや、違うよ。今夜は、これから内祝だ。電車が無事にこの湯ノ津に着いたので、いままでの、関係者だけで、組合が主催して、内祝をするんだ。お前達は、組合から、御招待を受けた、お客さんなんだよ。」

「デモ。」といって、口こもっていると、さらに親方は、

「なにを、ぐずぐずしているんだい。今日、いまからうちに帰ったって、お前達のメシは、ないんだよ。」

お前達の、オフクロさんや、カミサンたちには、組合から、祝の品と、祝膳が行ってるんだ。今夜、カミサン達は、お前さんたちのメシなんざ、作りゃしないから、

お前さんたちの着物は、祝膳を届けた帰りに、預ってきているから、温泉に入って、サッパリして、着替えて席に着けばいいよ。

それに、今夜来る人達は、お前さん達が、知っている人ばかりだよ。

駅や線路を造った、土木会社の職人達や、電線を引いた電灯会社の、職人達だけだよ。気兼ねする人なんか、呼んでいないよ。あとは、車両会社の、石原さんと、小野さんだけだ。それでも、まだ何か言いたいのか。」

ここまで、親方に言われると、言い返せなくなり、内心では、組合の人達の親切が、うれしくなりましたが、最初に駄々を、こねた手前、親方にしぶしぶ付いていく、ふりをしながら、付いて行きました。



## 電車が来ました

<http://p.booklog.jp/book/31841>

著者 : oerxx

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/oxdream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31841>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31841>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.